

『南山考講記』の「地、甜」音

矢放昭文

1 はじめに

島津氏第二十五代、薩摩藩第八代藩主の島津重豪(1745-1833)は江戸時代の中期、明和年間(1764-1772)～文化年間(1804-1818)、に藩政改革を積極的に推し進めただけでなく、学術面では『質問本草』『成形図説』などの本草学、歴史分野では『島津世家』『琉客談記』『島津国史』などの著作を残したことで知られている。ことに近世の唐話学では文化12年(1812)に刊行された『南山俗語考』(以下『俗語考』とする)がよく知られるところである。

既に知られるとおり同書には稿本が現存する。汲古書院『唐話辞書類集』巻五に収録される復刻本『南山考講記』(以下『講記』とする)である。架蔵者であった長澤規矩也1971の解説によれば「底本には明和丁亥(四)の跋があり、巻次を分たず、所々に貼紙があるので、稿本かと思はれる」と記しており、この解説に従えば『講記』は、明和丁亥すなわち1767年、『俗語考』刊行の46年前、重豪23歳時に仕上がっており、刊行水準にはまだ届いていなかったものの、重豪の座右にまとめられていた手稿本であると考えられている。小稿は『講記』が記録する域外漢字音としての唐音(カタカナ転写音)について若干の語音特徴を述べることを目的としたい。

2 従来の研究成果

『俗語考』『講記』の他、筑波本『南山考講記』(抄本)、琉球大学伊波文庫本『南山俗語 琉球詞和解』、内閣文庫本『南山俗語 琉球詞和解』、内閣文庫蔵『君臣唐話』など、『講記』成立以降に通行した抄本、刊本等の諸資料につ

いて綿密な調査を積み上げ、その結果を公にした岩本真理1989「『南山俗語考』の⁽³⁾⁽⁴⁾ことば」、1991～1993「『南山俗語考』の唐音について(1)～(3)」⁽⁵⁾など一連の詳細な研究成果にもとづけば、『俗語考』と『講記』の間には、唐音表記のみならず収録語彙などの語学的特徴についても「何らかの断層を想起させるに足る」⁽⁶⁾差異が詳細に確認されている。

特に「全般的な傾向として、写本と刊本の間で見られる違いは、単なる訛音の訂正という面にとどまらず、校訂者自身の依拠した音系、あるいは依拠することを意図した音系へと意識的に変更されたと考えられる⁽⁷⁾」と述べ、唐音注記については、『講記』から『俗語考』にいたる間に、単一の校訂者による改変が明確に認められることを立証している。岩本1989以降の、同氏の一連の研究成果の一つは、その唐音注記の詳細な分析にもとづき、華音(唐音)の校訂者と目される石塚崔高(明和三：1766-文化十四：1817)が長崎で身につけたと推定される南京音、さらには藩命を受けて江戸昌平饗に赴き修得した北京音知識を基準としての校訂が進んだことを十分に解明している点である。

3 『講記』筆録基準の非重層性

江戸時代の唐音についてのこれまでの研究成果は、例えば、有坂秀世⁽⁸⁾1940、小松寿雄⁽⁹⁾1985、岡島昭浩⁽¹⁰⁾1988、高松政雄⁽¹¹⁾1985ab、岩本真理⁽¹²⁾2000/2001などにより詳細に構築されているが、中でも重要な研究は有坂1940である。同論文は「江戸時代中頃のハの頭音の音価」を唐音資料研究にもとづいて展開された研究成果であるが、黄檗系唐音、心越系唐音の資料のみならず、長崎で行われた譯官系統の唐音文献についても、当時入手し得る膨大な唐音資料を俯瞰すると同時に、緻密な渉獵を積み重ね、これらの唐音資料に見える転写法、語彙の特徴について詳細な記述を行っている。唐音研究には資料の性質を周到に見極めて研究を進めることが肝要であること、さもなくば複数の淵源が措定される可能性のあること、また音系と語彙の分析法が語る唐音の多様性、

などを強く読み取ることが可能である。

長崎唐音の代表的な担い手とされる岡嶋冠山については「官話と俗話との双方に通じていたこと」⁽¹³⁾、「唐話纂要に於いて俗話を採用した冠山も、唐話便覧・唐話雅俗語類・唐語使用等などになると、いつしか官話に轉向してしまった」⁽¹⁴⁾と述べ、『唐話纂要』（享保3年序、1718）とその後成立の『唐話使用』（享保10年序、1725）、『唐譯便覧』（享保11年序、1726）の間の転写法の相違について夙に指摘している。有坂1940の研究成果に基づけば、『水滸伝』などの白話小説を題材とする書面言語音と、長崎において自ら通事を体験した際に修得した華語に由来する唐音を冠山自身が身につけていたからには、当然のことながら、冠山自身の唐音に重層的側面を予測することが出来る。

このような有坂秀世1940の詳細な資料分析の姿勢を継承し、なお且つ方法的にこれを乗り越えた研究として森博達1991を挙げることが出来る。同論文では新井白石（明暦3-享保10：1657-1725）の『唐音譜』（享保4年：1719自序）が収録する「五十母字音釋」を資料として、五十音図が示す各音節の枠組み内に、音訳字、唐音、現代方言音、中古音類を左・上・下・右に各々記入し、白石の言う「杭泉漳福各州音」それぞれの方言について現在入手し得る資料を採用し、これに分析を加えた結果をまとめている。その結論のひとつに、白石が「漳州音」と記すものは実は「南京官話音」の誤りである蓋然性が高いこと、同時に、当時の長崎のハ行音は唇音であったことなどの推定を、精度の高い論拠にもとづいて実現している⁽¹⁵⁾。

岩本1989の精度の高い研究成果にも十分な説得力を認めることができる。同論文の成果にもとづけば『俗語考』も冠山『唐話纂要』を「かなり意図的に踏襲している」⁽¹⁶⁾とのことであり、『唐話纂要』が『俗語考』に及ぼした語音・語彙の複雑な様相を克明に解き明かしている。また一方で、『講記』と『講記』の異本と見做される筑波大本『南山考講記』、伊波文庫本『南山俗語琉球和解』、内閣文庫本『南山俗語 琉球和解』（『琉客談記』内）について、そのカタカナ唐音表記に整理を加えて分析し、全般的視野に立ったうえで『講

記』の成立過程を推断している。その結果に従えば、汲古書院本『講記』が最も原初的なもの、非重層的なものと考えることが可能である。

従って、岩本氏の一連の詳細な研究成果に立脚したうえで『俗語考』から『講記』へ、時間軸を遡って視点を投ずれば、明和丁亥（1767）の時点で現存の姿が出来ていた『講記』筆録者の転写習慣と基準は『俗語考』ほどに重層的ではなく、むしろ素朴なものであったのかも知れない。岩本氏の言う『講記』と『俗語考』の間の断層的差異を究めれば、『講記』の直接の筆録者が重豪自身であったか否かは別として、提供源あるいは取材源から得られる語音・語彙の言語情報を筆録する際の基準の一部に、習慣として揺れることの少ない一定の趣向を窺うことが出来るかも知れないのである。なぜならば、岩本1989の言う断層的な差異は、筆録習慣として揺れの少ない転写表記の構成基準を認識してはじめて浮上する特徴だからである。

4 「地」「甜」二字の唐音

この点についていえば、小稿で取りあげる『講記』の「地」「甜」二字の唐音表記も、断層的差異の一例に数えることが出来ると思われる。

筆者の観察によれば『講記』が収録する「地、甜」二字は、すべてラ行イ列、エ列、つまり「地：リイ」、「甜：レン」と表記されており、例外を認めることがない。「地：リイ」について拾い上げてみると、以下の如く計21例を確認することが出来る。

南山考講記1767（汲古書院復刻版）				
頁	巻	標目語	音註（唐音）	注釈
34	巻1	土地廟	ト [○] リイミヤ [○] ウ	土神
65	巻2	暗地裡	アンリイリイ	ナイセウデ
69	〃	天差地遠	テン ツア、リイ エン	ヲ、キニチガツタ
137	〃	本地有	ベン リイ イウ	ヂケニアル
140	〃	本地人	ベン リイ ジン	ヂケノ人
189	巻4	團、地都是山		マワリハミナヤマ
		ドハン	、リイ ト [○] ウ ズウ サン	

々	々	地滑澁	リイ ワ タ	ヌメ、スル
206	々	魓地裡	エ リイ リイ	クラガリ
243	卷5	天地	テン リイ	テンチ
253	々	地動	リイ ドン	ヂシン
々	々	空地	クン リイ	アキチ
々	々	地基	リイ キイ	ヤシキ
々	々	肥地	ウイ リイ	コヘツチ
々	々	瘦地	スエ〇ウ リイ	ヤセツチ
254	々	地方	リイ ハン	チカタ
254	卷5	平地	ピン リイ	ヒラチ
371	卷6	地板	リイ パン	イタ シキ
399	卷7	地扁蛇	リイ ベン ジエ、	マムシ
481	卷8	田地	デン リイ	(君臣唐話)
486	々	底下地	テ〇イ ヒヤア リイ	(君臣唐話)
491	々	天地	テンリイ	(君臣唐話)

「土地廟：ト〇リイ ミヤ〇ウ」(巻1)、「本地：ペンリイ」(巻2)、「地滑澁：リイ ワ タ」(巻4)、「天地：テン リイ」「地動：リイ ドン」(巻5)など、量的制限はあるものの、『講記』の巻3を除き、巻1～8に収録される「地」字を含む語彙計21例は一律に「リイ」と表記されている。このことは筆録者が少なくとも複数でないことを物語っている。

一方、「甜：レン」を含む語彙は巻3と巻7に認めることが出来る。巻3では、「甜話頭：レン ワア デ〇ウ」、「甜東西：レン トン スイ」、「有些甜：イウ スイ レン」、「甜得緊：レン テ キン」、「蜜甜的：ミ レン テ」など計5例、巻7では「甜菜：レン ツアイ」、「甜瓜：レンクハア」「甜醬：レン チヤン」など計10例を認めることが出来る。

なお「甜」の字体については、筆録者あるいは伝達者の特質を考える上で注意を払っておく価値がある。小稿での挙例はすべて異体字と見做される「甜」「甜」を使用しており、これらの字体は筆録者の習慣なのか、あるいは伝えた伝達者の字体知識によるものなのか、を考えるべきであるが、いずれにしても、正統漢字の教養とは異なるものがあつたことを、さらには『講記』の成立過程を考える上で一つの特徴と見做すことが出来るであろう。

125	卷3	甜話頭	レン ワア デ○ウ	コ、ロヨイハナシ
165	〃	⁽¹⁷⁾ 甜東西	レン トン スイ	アマイモノ
166	〃	有些甜	イウ スイ レン	チトアマイ
〃	〃	甜得緊	レン テ キン	イコウアマイ
〃	〃	蜜甜的	ミ レン テ	ミツアママノ
382	卷7	甜菜	レン ツアイ	ミヅナ*
384	〃	甜瓜	レン クハア	クハシ ウリ
389	〃	甜醬	レン チヤン	ヒシヲ
449	〃	甜酒	レン チウ	アマサケ
450	〃	甜	レン	アマイ

5 『俗語考』での改変

一方『俗語考』では「地」は「テ○イ」（巻1，1帖：以下帖数略）（巻1，14）（巻2，26）、「デイ」（巻1，13）（巻1，22）（巻2，19）（巻20，20）など、「テ」に半濁点または濁点を附されることが多い。また半濁音の右側に更に濁点を加える例、また|を加える例もある。

半濁音記号の右側に更に濁点を付ける字例については、おそらく読者に「通常の濁点ではない」という注意を促す意図があったものと思われる。つまり収録源の語音は、筆録者が日常接する日本語音の濁音とは異なる「華語の濁音」であることを認識したうえでの注記であると判断できる。⁽¹⁸⁾

|を加える例についても、特にこの記号を加えている以上、発音上の注記であったことは否定できない。音節毎の発音を重んじる指示記号であった可能性があると思われる。なお『俗語考』では、『講記』に見られるラ行イ列「リイ」での表記例は一切見当たらない。

「甜」字については『俗語考』では「テエン」（巻2，14）または「デエン」（巻5，18）などに改められておりラ行/エ列音は見当たらない。

「地」「甜」二字の『講記』『俗語考』巻の転写変化をまとめると以下の如くなる。

	『講記』	『俗語考』
地	リイ (ラ行/イ列)	テ○イ、デイ、(タ行、ダ行/イ列)
甜	レン (ラ行/エ列)	テエン、デエン (タ行、ダ行/エ列)

『俗語考』巻5末尾の識語「和譯臣曾槃校、華音臣石塚崔高校」が額面通りであるとすれば、『講記』から『俗語考』への「ラ行→タ行・ダ行」表記の変化は、すべて石塚崔高による華音校訂によるものと判断することができる。

なお『俗語考』における「地」字についての転写状況の一部は以下の如くに示すことが出来る。

『南山俗語考』1812 ⁽¹⁹⁾				
巻数	帖	語彙	唐音	注釈
巻1「天部」「天文時令類」	1	天地	テエン テ○イ	
「地部」「地理名稱類」	10	空地	コン テ○イ	アキチ
〃	〃	地基	テ○イ ギイ	ヤシキ
〃	〃	肥地	ウィー テ○イ	コエツチ
〃	〃	瘦地	スエ○ウ テ○イ	ヤセツチ
〃	〃	地方	テ○イ ハン	ヂカタ
〃	〃	田地	デエン テ○イ	デンチ
〃	〃	平地	ピン デイ	ヒラチ
〃	13	團團地都 是山	ドワン、 デイ ドラーズウ サン	マハリハミナヤマ
〃	13	地滑澗	デイ ワ タ	ヌメ、スル
〃	〃	湖地多	ウ デイ トフ	ミツウミガオホヒ
〃	14	地動	テ○イドン	ヂシン
「人部」「人品類」	22	本地人	ペンデイジン	ヂケノ人

6 中古音系定母と漢語方言音

「地」「甜」両字は、漢語中古音系ではいずれも全濁声母定母（「地：徒四切、止開三去至定」「甜：徒兼切、咸開四平添定」）に属し、カールグレン（高本漢）の中古音再構成の根拠となった呉語では平仄を問わず [d]、安南では [d]、日本呉音では [d]、[z]（一等）、[d]、[dz]（四等）、漢音では [t] /

(一等)、[t] [tɕ] (四等) 等の実例が集められ、総合的に/*d/音を仮定して⁽²⁰⁾いる。いずれも破裂音であり、流音(側面辺音[r-]又は[l-])に発音される例については、調査された時代の制約もあるが、カールグレン氏の「方言字彙」には報告が見当たらない。⁽²¹⁾

一方で比較的新しい調査報告、例えば李如龍・張雙慶1992によれば、贛方言地域下の都昌に[地:li¹] (pp.50)、[甜:lien^{2B}] (pp.86)という定母>[l-]声母化の実例が報告されている。但し都昌では定母以外の舌尖中音(端透)声母も流音化している例が報告されており、『講記』の該当課題を解釈する強力な根拠とはならない。単字では:[土:lu³] (pp.216)、[田:lien^{2B}] (pp.212)、[鉄:lie^{7B}] (pp.214)、[定:liŋ⁶,lian⁶] (pp.148.)などであり、二音節語の頭位置例として「通書luŋ¹ ʂu¹」(pp.228)、後位置例として[鋤頭:dzu^{2B}ləu⁰] (pp.230)などが挙げられている。

また他の方言調査報告、例えば曹志耘主編2008「056頁」⁽²³⁾「銅定的声母」によれば建陽・武夷山(いずれも閩北)に/l/[l]声母、宣城・南陵(安徽東南部)/r/[r]、繁昌・蕪湖県(安徽東南部)/t/[t]、都昌/l-/ (江西)、漣源/l-/ (湖南)などの記音例が報告されている。但し同報告では定母>L音現象が起きる際の母音の広狭などの条件は提示されておらず、さらに掘り下げた詳細を知ることは今のところできない。

7 「角^カの饅^ウ餛^ロ屋^ン」と薩隅方言でのD>L/R現象

『講記』の唐音転写は域外漢字音である以上、筆録者、つまり日本語側の現象として解釈することが最も穏当であろう。その点を踏まえると、「地」「甜」(中古定母字)をラ行音イ列・エ列で記す字例については、薩隅方言のD>L/R現象によるものと解釈することが可能かもしれない。

上村孝二1983によれば:「博多地方の「角^カの饅^ウ餛^ロ屋^ン、道具^{ローグライテ}出して」式発音は有名である。だがこれはd>rではなく[d]と[r]の中間音を用いているので、ダ行子音は前舌と歯茎の接触が不完全であり、よって[r]に近く聞こえ

るのだ。」⁽²⁴⁾と記されている。

但し、ラ行とダ行の混乱については、柴田武⁽²⁵⁾1988にも詳しい言及がある。上村が有名とする博多方言の「角の饅^カ餛^ウ屋…」について、柴田は「最も有名なのは大阪河内地方で、カロノ ウロンヤ（かどのうどん屋）、ヨロガワノミル ノンレ ハラ ラブラブ（淀川の水 飲んで腹 だぶだぶ）などがこの方言をからかう文句につかわれる」…「このなまりは河内だけでなく、奈良・和歌山県にも、さらに四国の香川県、愛媛県の島々にも及んでいる。」…「このほか、新潟県の南蒲原・三島・刈羽・古志地方および佐渡でさかんである。佐渡では、サロコトバ（佐渡ことば）と言って、ラッレモ オランカッタラロー（だれも居らんかっただろう）のように言う。」…「九州でも各地に混乱があり、特に鹿児島県で著しい。」⁽²⁶⁾と述べ、この現象が薩隅方言のみならず博多方言にも限定されず、全国的に広がることがわかる。

ラ行とダ行は調音部位が重なること、舌根を緩め、舌の動きを前方に弾けばダ行からラ行への移行はきわめて起こり易い。またこの逆の動きによりラ行からダ行へも移行すると考えられる。容易に気づくことであるが、udon > uron、yodogawa > yorogawa、sado > saro など dogu 以外はいずれの d > r 変化も 2 音節目、しかも前後に central あるいは back 母音を伴って起きていることに注目すべきである。つまり「角の饅^カ餛^ウ屋」は『講記』の「地」「甜」唐音における D > L/R 現象を解釈する根拠にはなり得ないのである。

8 『漂流民の言語』と L/R > D 現象

村山七郎⁽²⁷⁾『漂流民の言語』は18世紀のラ行 > ダ行例を記録している。同書の記録する「伝兵衛の行った報告（1702年1月、モスクワのシベリア庁で）」に基づく当時の大阪方言の5番目の特徴は：「ラ行頭子音がdのような印象を与えたことが、阿弥陀如来を Amida Njodai（アミダニョダイ）と表し、また釈迦如来を Ша-Кайговдай（多分 Jakanjodai）と表しているところから明らかである。」⁽²⁸⁾と記している。つまり17世紀末の大阪方言では、語中位置

の「來」について /dai/ 音を充当している事例のあったことを伝えているのである。

村山1965はまた同書「ゴンザの伝える18前半の薩摩方言」でも「Штакава [薩摩方言ではシラがシタとなる。シラカワのこと]」と記しており、流音から破裂音への移動の実例を一部記録している。いずれも D > L/R 現象とは逆の例であり、『講記』の事例を解釈する根拠とすることは難しい。

博多方言、薩隅方言の D > L/R と同様、むしろ当時の日本の各方言で見られた現象ではないだろうか。上村1983、柴田1988、村山1965が報告する D > R/L、R/L > D の変換は、いずれも語頭ではなく語中の、[u, o, a] central, back 母音、つまり調音位置が中央または後部の広母音が前後の位置に来る傾向が大きいこともこの解釈を支えるものである。

9 小結に代えて

そもそも『講記』が伝える「地、甜」二字の唐音ラ行イ列・エ列音は、筆録者が、少なくとも複数ではなかったこと、又日常接する濁音とは異なる濁音であると認識したからこそ記されたものである。それぞれ音節の独立性が強いだけでなく、その濁音の強さが薩摩側の濁音とは異なっていたからこそラ行イ列・エ列に転写されたのであるから、彼我の濁音音質の違いに由来する、と考える方が妥当である。

但し、上村のさらなる記述、つまり鹿児島な南部の方言について「…下甌島、種子、屋久などは d > r が目立つが、その [r] は前舌を歯茎にうんとつけ後方に引く破裂音であって、[r] の強い [d] [r] の中間音で、本来のラ行弾音と区別する老人もあるほどである。」との解説が『講記』の「地」「甜」唐音における D > L/R 現象を考える拠り所の1つになる可能性も、今のところ否定はできない。

但しそれでも、「地」(徒四切：止開三去至定)は『広韻』では少韻字1字のみからなり、「甜」(徒兼切：咸開四平添定)の小韻も「甜恬湑恭恬」5字

から構成され、きわめて限定されている。なぜ『講記』でも限定されて『韻書』由来を彷彿させるのか、このことは薩隅方言のD>R/L現象では解決することの難しい文化的な問題であり、伝達者あるいは筆録者の身についていた音習慣であることも否定できない。

注

- (1) 長澤規矩也1971『唐語辞書類集』汲古書院復刻版、冒頭解説。
- (2) 芳即正1980『島津重豪』吉川弘文館、pp.108-1109。「第六 各種図書の編纂刊行」「一『南山俗語考』」は、明和丁亥（1767）に起草を命じられ編纂に着手したとしている。芳1980のこの記述は寛政4年（1792）に重豪の記室に採用され、爾後43年に涉り重豪に仕えた曾槃の『仰望節録』（天保3年1832）に基づくものであり、『講記』『俗語考』など写本、刊本など現物資料の検討、通行状況から判断されたものではない。一方、岩本1989によれば『講記』は写本段階で一部に流布しており、島津重豪は跋文で自らの備忘録と述べつつも、一方で写本を世に送り出していた、つまり後日の刊本完成を目的として備忘録である『講記』に各面から微調整を加えていたと解釈できる可能性のあることを論述している。
- (3) 岩本真理1989「『南山俗語考』のことば」『鹿児島経大論集』第30巻第1号、pp.81-107. pp.82.
- (4) 岩本真理1990「『南山俗語考』の語彙的特徴」『人文研究』大阪市立大学文学部、第41号第5分冊、pp.279-291.
- (5) 岩本真理1991「『南山俗語考』の唐音について（1）」『人文研究』第43巻第11分冊、pp.945-971. 1992「（2）」第44巻第5分冊 pp.225-258. 1993「（3）」第45巻第5分冊 pp.1-30.
- (6) 岩本1989等の言う「断層を想起させるに足る」差異の主要事項は岩本1993に詳しい。
- (7) 岩本1993.
- (8) 有坂秀世1938「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」『國語と國文學』、後『國語音韻史の研究』増補新版、三省堂1957、pp.221-243. によれば、唐音資料が反映する音価には黄檗唐音、心越系唐音など禪林伝承の唐音と岡島冠山『唐語編要』に代表される譯官系統文献では唐音転写法が大いに異なること、同じ著者でも異なっていることなどを含めて詳細に考証されている。
- (9) 小松寿雄1985「江戸時代の国語－江戸語その形成と階層－」国語学叢書7、東京堂出版。

- (10) 岡島昭浩1988「近世唐音の重層性」『語文研究』九州大学国語国文学会、63号 pp.36-50.
- (11) 高松政雄1985ab「近世唐音弁－南京音と浙江音－」『国語国文学』(岐阜大学) 17号 pp.92-110.「近世的唐音の音体系」－江南浙北音としての－』『国語國文』54巻7号 pp.20-39.
- (12) 岩本真理2000/2001「筑波大学図書館蔵『南山考講記』について(1)(2)」『人文研究』52巻第4分冊 pp.1-12. 第53巻第4分冊 pp.19-31.
- (13) 有坂1938、pp.225.
- (14) 有坂1938、pp.226.
- (15) 森博達1991「近世唐音と『唐韻譜』」『国語學』166集、pp.13-21.
- (16) 岩本1989「南山俗語考のことは」『鹿兒島経大論集』第30巻第1号1989年5月20日、pp.81-107.
- (17) 巻3「甜話頭」、巻7「甜醬」に「甜」、他の例は「甜」に作る。
- (18) 但し、この半濁音記号の右側に更に濁点を付ける字例については、『講記』にも認められるものであり『俗語考』は『講記』を継承している。この点については一層の整理と分析が必要である。
- (19) 早稲田大学本図書館蔵本 http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho05/ho05_01975/index.html に依る。
- (20) 高本漢『中国音韻学研究』(台湾商務印書館、1940) pp.368-371.
- (21) 高本漢『中国音韻学研究』(台湾商務印書館、1940) [地] pp.557, [甜] .pp.593.
- (22) 李如龍・張双慶1992『客贛方言調査報告』厦門大学出版社。
- (23) 曹志耘主編2008『漢語方言地図・語音篇』商務印書館
- (24) 上村孝二1983(昭和58年3月10日)「九州方言の概説」『講座方言学・9・九州地方の方言』pp.1-28。(4)ダ行音とラ行音の混同(pp.12.)
- (25) 柴田武1988『方言論』平凡社。
- (26) 同上 所収「方言小事典」(pp.593-640.)
- (27) 村山七郎1965『漂流民の言語』吉川弘文館。
- (28) 同上 「伝兵衛に関するロシアの記録と17世紀末の大阪方言」pp.15.
- (29) 同上 「ゴンザとその業績」pp.27.
- (30) 上村孝二1983、前掲書、pp.13.

【追記】

小稿はH28年度科研費「対音資料による近代漢語音韻史の研究」(課題番号 15K02539)による研究成果の一部である。